

1914年のレーニン

—2つのエピソード—

倉 田 稔

はしがき

本稿では、1914年のレーニンの2つのエピソードを紹介する。1つは、第一次世界戦争勃発の時の約1ヶ月間の生活であり、他の1つは、その後ベルンへ逃れてからプレハーノフの演説と対決する件である。それぞれ「ガリチェンで」と「対プレハーノフ」と題しておく。

1. ガリチェンで

1

ハプスブルグ帝国¹⁾の北西の一州ガリチェン²⁾の西方部にポロニン(Poronin)という小さな村があった。農村で、半ば休養地であった。ポロニンの近くのベールイ・ドナーエツ村の、ある農家の別家屋に、レーニン(ウラジミール・イリイチ・ウリヤーノフ)と妻ナジェジダ・コンスタンチノヴナ・クループスカヤ、彼女の母エリザベータ・ワシリエヴナが借家住まいをしていた。その家の家主は、テレーザ・スクーペニという農婦であった。階下に二部屋があって、彼らは、一部屋を義母に、もう一部屋を寝室にしていた。狭いバルコニーが台所に通じていた。この台所は客間兼用であった。レーニンは、屋

1) Die Habsburgermonarchie, オーストリア帝国, オーストリア=ハンガリー帝国のこと。正式な名称はなかった。さしあたり、テイラー『ハプスブルク帝国』筑摩書房 1987年, を参照。

2) Galizien; Galicia 帝国の穀倉地帯の一つ。したがって人口の圧倒的部分は、農民であった。州都はレンベルグLemberg, つまりリヴォフ。現在ポーランドに属している。

根裏部屋を書斎にしていた。

亡命³⁾中のレーニン一家は、クラカウ⁴⁾に1912年以来住んでいた。だがクループスカヤがバセドー氏病にかかって、翌年ベルンで甲状腺の手術をした。その時、医者は、「ガリチェンで有名な保養所ザコパーネの山地に行って療養しなければいけません」と言った。しかしザコパーネは、人が余りに多いし、費用もかかった。それに較べるとポロニンは、ずっと人が少なく、費用も安上がりであった。そこで1913年の夏に、半年ほどポロニンで過ごした。その年の冬はクラカウで越したが、1914年5月9日から、またポロニンに来ていたのであった。

レーニンがハプスブルグ帝国に居た理由の一つは、ここがロシアの隣国であって、党の指導にうってつけであったからである。第一次大戦の前には、ここからロシアへの越境は容易であった。国境地帯の住民たちは、ロシア側からも、ガリチェン側からも、通過証「ポルパスカ」⁵⁾で、ごく簡単に国境を越えることができた。またこの通過証が二束三文で、非合法の人間でも買えたのである。ロシアとガリチェンの警察とは、何の連絡も関係なかった。クラカウの警察は、尾行もつけず、手紙の検問もしなかった。ロシア側のボルシェヴィキからは、党员クルィレンコ⁶⁾を通じて、秘密の連絡場所が指定され、非合法文書が国境を通過できた。彼は国境から近いルブリンに住んでいた。こうしてレーニンの指導は、容易にロシアにはいった。

レーニンは1913年の初めに、戦争は起きないだろうと考えていた。その証拠にゴーリキー⁷⁾あての手紙に書いている。

3) レーニンの国外亡命は、初め1900年7月から1905年11月まで、次に1907年12月から1917年4月までである。

4) Krakau; Cracow. 1846年以来オーストリア帝国領になったクラカウ公領の都。現在ポーランド領。

5) Н. К. Крупская, *Воспоминания о Ленине*. Москва 1968 (以下, Крупская と略), стр. 204; 『レーニンの思い出』下, 青木文庫 1978年, 99ページ。

6) ニカライ・ヴァシリエヴィチ, 1885-1938。サンクト・ペテルスブルグ大学法学部卒, 1904年ボルシェヴィキ入党, 軍事組織のリーダー。

7) Горкий (1968-1936), 有名なロシアの文学者。1905年革命で逮捕され, その後, 国外へ亡命。

「オーストリアとロシアの戦争は、革命（東ヨーロッパ全体の）にとってきわめて有利な事柄でしょう。しかしフランツ・ヨシフとニコラーシャ⁸⁾は、われわれの期待にあまり添いそうにありません。」⁹⁾

彼は以前から、カール・マルクスに関する論文¹⁰⁾の執筆依頼を、ロシアのグラナート出版社から受けており、ちょうど戦争の勃発するはずの一週間前に、執筆を中断しなければならないと、書いていた。しかしその理由は、戦争ではなく、党内問題つまりスパイ、ロマン・マリノフスキー¹¹⁾の事件であった。

だが第一次世界戦争¹²⁾が勃発した。それは1914年に、オーストリア・ハプスブルグ帝国がセルビアに宣戦を布告した時、始まった。

7月28日つまり戦争が起きた日に、彼は、着手していたマルクスについての論文をやはり仕上げるつもりだと、同編集部の手紙¹³⁾を書いている。帝国主義戦争について、まだ彼はのんびりした考えをもっていたのかもしれない。

だが戦争というとんでもない事件が起きて、事情が変わった。セルビアを援助するロシアは、オーストリアの敵国になった。オーストリアがロシアに宣戦布告するのは、ただ時間の問題となった。国境間の連絡は絶たれた。だがそれでもレーニンは、論文「カール・マルクス」の執筆をやめようとはしない。

その上、戦争は大規模になり始めた。ポロニンに滞在していたボルシェヴィキ党员たちは、ただちにレーニンの家に集まった。彼は部屋の中を黙ってあちこち歩いていたが、突然こう言った。

「戦時下で党活動を続ける新しい方法を、是が非でも見つけ出さなくてはな

8) オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世とロシア皇帝ニコライ二世。

9) *В. И. Ленин. Полное Собрание Сочинений*. изд. 5, [以下, *Сочинений* と略] том. 48. Москва; 『レーニン全集』大月書店〔以下, 『全集』, と略〕第35巻 67ページ。1月25日以降書いた、とされている。

10) 後に、論文「カール・マルクス」として現れる。『全集』第21巻所収。

11) ボルシェヴィキの国会議員であった。レーニンは彼を大変信用しており、スパイだという党员たちの知らせに、なかなか信じようとしなかった。しかしとうとう、彼がスパイであることが判明した。

12) さしあたり、テイラー『第一次世界大戦』新評論 1988年、を参照。

13) 7月28日執筆の手紙、『全集』第35巻 154ページ。

らない。とくにスイスやスウェーデンの同志によって、できるだけ早くロシアとの連絡を回復する必要がある。私は今日にでも彼らに書こう。」¹⁴⁾

それから彼は述べた。

「始まったこの戦争があらゆる矛盾を激化することは、客観的に避けられない。それは、階級闘争を強め、政治全体の危機を引き起こし、激化し、それによってロシアで新しい革命が近づくのを速めるだろう。」¹⁵⁾

ドイツがロシアに宣戦を布告した。そのニュースが届いた時、レーニンがジノヴィエフ¹⁶⁾に尋ねた最初の質問は、こうであった。

「第二インタナショナルはどんな反応をするのだろうか」

ジノヴィエフは、予言した。

「ドイツ社会民主党の紳士たちは、戦時公債問題で、カイザー〔＝ドイツ皇帝〕の政府にあえて反対投票をしようとししないでしょ。」

「いや、ちがう」とレーニンは答えた。

「彼らは皆そんなに臆病ではない。彼らは疑いなく戦争には反対しないだろう。しかし彼らの良心を満足させるために、反対投票をするだろう。もし労働者階級が彼らに対して立ち上がる恐れ以外の理由がないとすれば。」¹⁷⁾

しかし結局、ジノヴィエフの予言が的中し、レーニンの方が外れてしまうことが後に分かる。レーニンの見方は甘かったのである。

第二インタナショナルの大会がウィーンで開催される予定であったが、大戦勃発のため、パリに移された。レーニンは、ロシアの指導者がパリ大会に参加

14) *Lenin-Dokumente seines Lebens*. Bd. I, Leipzig 1980 S. 532

15) *W. I. Lenin Biographie*. Dietz Verg Berlin. 1961. S. 304;『レーニン伝』第2巻、大月書店 1960、406 ページ。このレーニン公式伝は、事実上スターリン時代に作られた物であり、また引用がレーニンからだけであり、材料が不正確に利用されている。特に晩年についてはスターリンに都合悪いことはねじ曲げられている。

16) Зиновьев, Григорий・Ефсеевич・Ладомилский, (1883-1936)。1902年から亡命した。ベルン大学に学ぶ。ボルシェヴィキ党员。彼は戦時中、レーニンの副官として活躍する。この時、ガリチエンのザコパーネにいた。

17) David Shub, *Lenin*. Harmondsworth 1969, p. 156

18) シクロフスキーあて手紙, 1914年7月31日

するよう指示した。¹⁸⁾ しかしパリ大会も戦争のため開かれなかった。レーニン自身は、国際社会主義ビューロー（＝事務局）International Socialist Bureauのブリュッセル会議¹⁹⁾ に出席しようとしたが、うまく行けなかった。²⁰⁾

7月28日から31日の間のレーニンの著作活動は、「論文『革命と戦争』のプラン」だけである。²¹⁾ ここには二種類のプランだけが併置されている。このプランには、彼の戦時中の根本方針の一つである反インタナショナルの項目はない。つまり第二インタナショナルの諸政党が戦争に賛成する前だったからである。そして戦時中の最も重要な二つの戦術——帝国主義戦争を内乱へ、ロシア・ツァーリズムの軍事的敗北——も、当然ながら入っていない。彼はこれを論文に仕上げようとしたのであろうが、できなかった、あるいはしなかった。

2

ガリチェンにいるロシア人は、早くも退去し始めた。

「戦端が開かれ次第、ガリチェンのロシア人は収容所に入れられる」という噂が飛んだ。この噂は確実さがあった。

この時、レオン・トロツキー²²⁾ も亡命していて、ウィーンに住んでいたが、8月3日に政治警察の長ガイヤーから、「明日の朝には、ロシア人とセルビア人の監禁令が出されるものと十分思われる」²³⁾ と言われている。

レーニンは出発を急いだ。

「しかし、それならどこへ行くと言うの？」と、妻のナジェジダが言う。「それにジノヴィエフの奥さんは重病人なのよ。」

ジノヴィエフ夫妻はこの頃ザコパーネに居た。そこには医者が出たのである。

19) 7月終りにブリュッセルで開かれた。

20) コベツキーあて手紙、1914年8月2日。日本語版全集では8月上旬とあるが、ロシア語版およびドイツ語版では8月2日とあるので、それによる。

21) *Сочинений*. том. 25, стр. 450-451; 『全集』第41巻, 418-419 ページ。

22) トロツキー (1879-1941), レフ・ダヴィドヴィチ・ブロンステイン。最も傑出したロシアの革命家、当時ボルシェヴィキとメンシェヴィキの中間にいた。伝記として、ドイッチャーのトロツキー3部作あり。この時、彼の住んでいたのは、ウィーンの郊外の静かな街路、アインジーデライガッセであった。

23) Leo Trotzki, *Mein Leben*. Berlin 1930, S. 226

クループスカヤの母も病気だった。一説によると、レーニンも病気だった。

やむなくレーニンは、当分の間、ポロニンにすることに決めた。しかしそれは、失敗になることが後に分かる。

彼はコペンハーゲンにいるコベツキーに手紙²⁴⁾を書いて、情報を送ったり、ストックホルムその他と連絡をつけて貰いたいと、依頼した。つまりロシアとの連絡を北欧廻りでつけようとしたのである。

オーストリアの動員が始まると、山間のポロニンの住民たちは、悄然としてしまった。軍の目的は、セルビアを攻撃し、同国を譲るロシアの攻撃を迎え撃つことであった。しかし住民たちは、誰との戦争なのか、何のための戦争なのかわからず、感激など全然ないし、ただ殺されに戦争へ征くに等しかった。尤も、首都ウィーンでは様相が違っていた。レーニン一家のおかみさんも、夫を戦争にとられ、悲しみにうちひしがれていた。

戦争にたいしてウクライナ人はロシアに同情していて、ポーランド人はオーストリア愛国者であった。

一方、村のカトリック僧は、説教台から愛国的感情をかき立てようとしていた。色々な噂が広まった。隣家の貧農の六歳の子供が、レーニンの家にしょっちゅう遊びに来ていたが、

「カトリックの坊さんが『ロシア人は井戸に毒をふりまいている』と言ったよ」と、クループスカヤにこっそり告げた。

新聞が日に二度来ており、誰もが郵便局に集まった。レーニンは、戦争がほんの数週間で終わるとは考えていなかった²⁵⁾。彼は交戦国の労働者の発言を注意深く読んだ、といわれるが、当時冷静な声は載らなかった。

彼は、戦時公債を討論するドイツ帝国議会の報道を待ち焦がれていた。そこでドイツ社会民主党の態度がはっきりするはずであった。彼は、フランスよりドイツの社会主義者を信頼していた。不安と期待の入り混じった気持ちで、彼は待った。

24) 注20) の手紙。

25) この当時、人々はその戦争が数週間で終わると考えていた。

しかしドイツ社会民主党は、8月4日のドイツ帝国議会で、戦債に賛成投票をしたのである。ボルシェヴィキ党员セルゲイ・バゴツキーは、ポロニン鉄道駅の近くに住んでいたので、8月5日の朝、早朝の列車を待って駅へ出かけた。ポロニンでは、クラウカからの新聞が汽車で来た。こうして彼は、人より早くポーランド語新聞を受け取り、読んだ。

「〔ドイツ〕帝国議会は戦債を満場一致で賛成した」とあった。

バゴツキーは、ただちにレーニンのところへ飛んで行った。²⁶⁾

「そんなことはありえない！」と、レーニンは叫んだ。²⁷⁾

「貴方がおそらくポーランド語の電文を不正確に理解したのだ。」

バゴツキーは、短い電文の載っているその新聞を彼に見せた。それでもレーニンは信じようとしなかった。第一、彼はポーランド語をよく読めなかった。二人はそこで、ナジェジダ・コンスタンチノヴナを叫んだ。レーニンは彼女のポーランド語の知識を大いに信頼していたのである。彼女は、バゴツキーの翻訳が正しいと認めた。もはや疑いの余地はなくなった。レーニンはただちに、ドイツ社会民主党の指導者が国際労働運動を裏切ったという歴史的意義をつかんだ。

レーニンはまた、

「これは第二インタナショナルの死だ」と言った。そしてこう付け加えた、

「僕は今日から社会民主主義者であるのをやめた。共産主義者になるのだ。」²⁸⁾

26) С. Ю. Багоцкий, В. И. Ленин в Кракове и Поронине. В: *Воспоминания о Владимире Ильиче Ленине*. том 2, Москва 1969, стр. 324.

27) Schub, p. 157。レーニンは、ドイツ社会民主党の新聞『フォルヴェルツ』を受け取って、こう叫んだという。「これはありえない。この号は偽造だ。ブルジョア・ドイツのごろつきが、特別号を印刷したのにちがいない。」(ibid.)

しかしレーニンは、7月後半に書いたカスパロフあて手紙(『全集』第43巻)によると、『フォルヴェルツ』を持っていない。だから上記の言は、伝説かもしれないし、あるいは特別号だけは手にいれたのか、である。

28) Багоцкий, стр. 325; Walter, *Lenine*. ヴァルテル『レーニン伝』角川文庫 245 ページ

レーニンが第二インタナショナルに寄せた信頼というのは大変なものであった。いわば田舎者の素朴さで信じ込んだのである。第二インタナショナルのシュトゥットガルト国際大会で、かつてローザ・ルクセンブルクと組んで、帝国主義戦争反対の特別修正案を出し、それが決議されたこともあるではないか？

レーニンは、第二インタナショナルの諸党の余りの裏切りに、そして信頼が深かったからこそ余計に、第二インタナショナルへの反感が強烈になった。

3

8月6日に、オーストリアはロシアに宣戦布告した。首都ウィーンでは、戦争開始とともに、愛国主義と好戦熱に浮かされた。祖国の皇位継承者²⁹⁾が暗殺されたことへの悲憤と、セルビアを小国と思っていたことが、原因であった。しかし、セルビアの後ろ楯にロシアがいることを思うと、オーストリア人は少しばかりひるんだ。戦争が勃発してから、オーストリア警察は、ガリチエン中でスパイ狩りをし始めた。外国人は昔、疑いの眼で見られていた。とくにロシア人は、敵国人となったので、なおさらであった。

8月7日に、ポロニンの憲兵曹長が、銃を持ち、村はずれに住んでいる貧農を立会人として連れ、レーニンたちの住居にやってきて、家宅搜索を始めた。レーニンがスパイだという、住民の告発を受けたからである。この曹長は何を搜索するのか良く分かっていなかったが、戸棚をかきまわし、装填していないブローニング銃を発見した。この銃は、レーニンの友人が、革命運動には銃が必要だと言って与え、レーニンにはそんなものは要らなかったが、うっかり処分しておかなかったものである。また曹長は、統計の入った農業問題にかんする数冊のノートを押収した。統計表を暗号表だと勘違いしたのである。また二、三、つまらない質問をした。立会人は、どぎまぎして、椅子の端っこに腰を掛け、疑わし気にあたりを見回していたが、曹長はその彼を嘲笑した。そして糊の入った壺を指さして、「これは爆弾だ」と断言した。それから「ウリヤーノ

29) フランツ＝フェルディナント大公。フランツ・ヨーゼフ1世皇帝の甥。

フにたいする告発状をもっているのです、お前を逮捕しなければならないのだが、どうせ明日の朝になれば、ノーヴィ・タルグ (Nowy Targ) へ送られるのだから、お前自身で朝6時の汽車で出かけてきた方がよいだろう」と、言った。ノーヴィ・タルグには、一番近い軍当局があり、郡役所の所在地でもあった。憲兵は、駅に出頭する誓約書を取りつけてから、そのまま引き取った。

逮捕の危険が出てきた。軍法会議に掛けられることが明らかであった。戦時には、また戦争の初期には、何かのはずみで殺されることがよくあった。

この日の夕方は雨であったが、レーニンは、ボルシェヴィキ黨員ヤコブ・ハネツキー³⁰⁾ の家へ、すぐ自転車で訪れた。

「私の住居に丁度いま、捜索が入った。地方憲兵隊の曹長が行なったのだ。鉄道駅で朝、彼と会って、一緒にノーヴィ・タルグへ行けと、命令した。この捜査は全く上っ面のものさ。この馬鹿は、党の通信をそっくりそのまま手を付けなかった。……〔中略〕……運がいいことに、党の通信だけが残った。というのは、これには住所や他の協力者の事項が入っているのだ。……君はどう思う？ 彼らは我々をノーヴィ・タルグで逮捕しようとするだろうか、それとも放免するだろうか？ 展望はとてもよくない。今は戦争だしね。間抜けな憲兵隊は、私をスパイ行為で疑っているし、多分私は逮捕されるだろう。」

レーニンは、大変な事が起きたと思った。だが、内心とは違って、それほど心配していない風を見せた。しかしハネツキーは、正しく判断した。

「それは余りうまくない。その馬鹿な憲兵は貴方をスパイだと思っている。きっと逮捕される。」

クラカウ警察は、レーニンがロシアから移住してきたこと、そして彼がツァー

30) ヤ・エス・ハネツキー。ロシア語の発音ではガネツキー（本名、ヤ・フィルステンベルグ、一八七九年生まれ）。ポーランド＝リトワニア社会民主党指導部員。ロシア社会民主労働党の、第二、第四、第五回大会で、ポーランド代表。第五回大会で、全ロシア中央委員。1912年のポーランド＝リトワニア党の分裂後、分裂派の辺区指導部員。1913年に、ポロニン会議に参加。1914年6月、マリノフスキー挑発行為調査委員長。1912年の第二インター・ブリュッセル国際大会と、1914年7月の国際社会主義ビューローのブリュッセル会議に参加した。

リズムの非妥協的な敵であることを恐らく知っていた。彼をずっと注意し続けていたし、レーニンがオーストリアの内政には関わらないことが、分かっていた。だがそれは、クラカウの態度であって、ノーヴィ・タルグの方では、話は違った。こちらでは最悪の事態が予期できた。

レーニンは、クラカウ警察あてに電報を打って貰った。

「当地の警察は、私にスパイの嫌疑をかけている。私は二年間、クラカウのツヴェジネッツとルボミルスチェゴ街51番地に住んでいた。自分でツヴェジネッツの警察署長に住居申告をした。亡命者で社会主義者である。ポロニンとノイマルクト³¹⁾ 区長に電報して誤解を防いでいただきたい。」³²⁾

ハネツキーは、オーストリア社会民主党の代議士ドクトル・マレークに電報を打った。マレークは、レーニンがクラカウに住む許可を取るのを助けたことがあった。

レーニンは、クループスカヤが母と二人でポロニンに残って大きな家で淋しく暮らすのを、心配した。そこで彼はポロニンにいたボルシェヴィキ黨員チホミルノフ³³⁾ に話して、しばらくの間、レーニンの住居の二階の部屋に移って来て貰うことにした。

レーニンとクループスカヤは、この日ひと晩中座り通し、眠ることができず、恐ろしく不安な気持ちであった。翌朝になって、クループスカヤはレーニンを駅まで見送った。

憲兵のレオン・マトゥイシュクは、次のような報告書を市長に送った。

「上述のウリヤーノフは、著述家であり、政治的犯罪によってロシアから逃走を余儀なくされ、その後スイスに住み、最近二年間はクラカウに滞在し、夏

31) ノーヴィ・タルグのドイツ名。

32) 原文はドイツ語。Lenin Briefe 1914-1917. Bd. IV. Berlin 1957, S. 1-2. 『全集』43巻 538ページ。Shub, p. 157 では自分で打ったとされているが、本人が打ったのではない。

33) 彼はオロネックの流刑地から帰ってきたばかりだったので、『ブラウダ』編集局は、休養のために、つまり流刑中に散漫になった神経をなおすために、また同時にレーニンの仕事を助けるために、彼をポロニンに送ったのであった。

はベールイ・ドナーエツ村で過ごした、と申し立てている。審問の結果、上述のウリヤーノフは、前年もベールイ・ドナーエツで過ごし、同人のもとで働いていた同村出身のフランツ・ブールの娘ヴィクトリアの申し立てによれば、そこで他のロシア人と種々の会議を開き、時にはその人数は非常に増え、納屋が超満員になるほどであった。動員が宣言されて以来、住民は、これら外国人の行動を非常に注意深く見るようになり、ウリヤーノフがスパイに相違ないとの風説が立ち始めた。同人が近傍の山地を歩き回り、また道路を描き写すなどの行為があったからである。しかし、調査の結果、こういうことは事実ではなく、同人はただ山地を散歩していたに過ぎないことが明らかになった。

上述のウリヤーノフの家を探索した際、同人がスパイである事を示す事実はなにも一つ発見されず、同人がペテルスブルグ住居者と定期的に文通していたこと、また同人が協力者になっていたと思われる『プラウダ』紙の編集部と連絡を保っていたことが、明らかになっただけある。

前述のウリヤーノフ家宅搜索の際、オーストリア＝ハンガリー、ドイツの種々の比較考査を内容とする、三冊のノートが発見された。それらのノートは、この報告書に添えて提出する。³⁴⁾

レーニンらが電報を打ってから数時間後、クラカウ警察署長は、憲兵にこう通報した。「当署は、ウリヤーノフには一切スパイの嫌疑はないと考えている。」そして「レーニンを拘束するいかなる理由もない」と。

しかし、レーニンはポロニン駅から連行され、ノーヴィ・タルグの予審判事に尋問され、そのままスパイ容疑で投獄されてしまった。クラカウからの電報は、レーニンが連行されてから、ポロニンの憲兵の手に入ったからである。

スパイ容疑と見られてもしかたがない点は、確かにあった。レーニンは統計の計算やノートを取る場所として、山の中の静かな片隅を選んでいて、彼を良く知る村人は、ロシアから来る手紙の数が無闇に多いこと、怪しげな連中がしきりに会いに来ることなどに不審を抱いた。彼が山中にこもるのは、ロシアの

34) 『レーニン亡命記』下、197-8 ページ。

国境に近く見晴らしがきく所で、国もとの官憲と信号を交わすためだと、思い込んだ。その上、クループスカヤは、近所の農民の娘を家事手伝いに雇っていたが、その娘がレーニンたちについて、あることないことを近所中に言い触らしていた。レーニンはまた、この近くを良く散歩したものだ。だから密偵は、「レーニンは丘を越えて行き、地形上の路を製図した」と言ったのである。

交戦諸国の警察は、商業新聞の扇動的な記事に焚きつけられて、至る所にスパイがいると思った³⁵⁾。軍法会議は、疑わしく好ましくない人物をあささり片付けた。つまりすぐ裁判にかけたのである。死刑とかリンチにするには、ちょっとした疑いで十分であった。

4

同じ日に、友人たちやクループスカヤはポロニン駅で列車を待っていた。だが降りたのは、憲兵だけだった。

ハネツキーは、1台の荷馬車を雇い、ノーヴィ・タルグにたどり着き、管区の長官——帝国・王国領管理人——に会って、そこで一騒動起こした。世界的に有名なロシアの革命家を逮捕してしまったこと、レーニンが社会主義インタナショナル事務局員の一員で、保護を与えるべき人間であり、その生命は保証すべきこと、を話し、釈放を要求した。判事カジメシ・グロヴィンスキーにも会って、レーニンの人となりを語った。グロヴィンスキーは言った。レーニンが高潔な人だという印象を受け、スパイ容疑はとてもかけられない、長官が事を荒立ててしまった、彼が事件を軍法会議に移してしまった、と。長官は判事に公式文書を渡した、「スパイ容疑の件の今後の取扱について、本件をクラカウ第一軍団参謀本部、リヴォフの県知事会議幹部会、クラカウとリヴォフの警察に報告します。」と。

ハネツキーは、クループスカヤがあくる日レーニンに会見できるよう許可をとった。

35) P. Kerschenzev, *Das Leben Lenins*. Moskau 1937

36) Viktor Adler, 1852-1918

ハネツキーがノーヴィ・タルグから帰るとすぐ、彼とクループスカヤは、ヴィクトル・アドラー³⁶⁾とヘルマン・ディアマント Hermann Diamand に援助を求めた。オーストリア社会民主党の創設者であるアドラーは、社会主義国際ナショナル事務局員で、オーストリア社会民主党議員でもあった。ディアマントは、ポーランド社会民主党の、リヴォフ選出のオーストリア帝国議会議員である。二人は国際社会主義ビューローの一員であるレーニンを知っていたのである。

クループスカヤは、アドラーにこう手紙を書いた。

「尊敬する同志！ 私の夫、ウラジミール・ウリヤーノフ（レーニン）は、ポロニン（ガリチア）でスパイ容疑で逮捕されました。当地では住民は大層気が立っているため、外国人は誰でもスパイだと思うのです。……今やこの件は軍当局の手に移されてしまったのです。……尊敬する同志！ お願いします。私の夫を助けて下さい。貴方ご自身、夫をご存知です。……ノイサンジェツの検事にあなたが私の夫をよくご存知で、この事件は誤解であると断言できる旨の電報を至急打って頂きたいのです。……」³⁷⁾

またハネツキーは、ガリチエンの社会民主党代議士イグナツ・ダシンスキー Ignaz Daszynski に電報を打った。オーストリアの社会主義者たちは、ドイツの同志と同じように、一般に戦争を支持していた。そのため皮肉なことに、普段よりも政府とはうまくいっていたのである。

ハネツキー以外に、ポーランド社会民主主義者バゴツキー、有名なポーランドの作家シュテファン・ジェロムスキー³⁸⁾、ヤン・カスプロヴィチ³⁹⁾、ウラジスラフ・オルカンその他が、レーニンを擁護した。ジェロムスキーは、政府に嘆願書を出し、オルカンは、ノーヴィ・タルグへ向かって、グロヴィンスキー判事に自ら請願書を手渡した。ザコパーネに住んでいたジノヴィエフは、大雨

37) 『レーニン亡命記』

38) Stefan Żeromski, 1864-1925. ポーランドの自然主義文学者。

39) Jan Kasprowicz, 1860-1926. ポーランドの詩人・文学史家。この時、ルヴォフ大学教授。そして、ポロニンに住んでいた。

にも係わらず、ドクトル・ドゥルスキーのところへ飛んでいった。ドゥルスキーは、ザコパーネから10露里のところに住んでいて、元「人民の意志」派のポーランド人医師であった。ドゥルスキーは、さっそく軽馬車を雇ってザコパーネへ行き、電報を打ったり、手紙を書いたりし、また交渉に出かけた。

レーニンと会見できるようになったクループスカヤは、毎日会うことを許された。朝六時の汽車でポロニンから一時間かかってノーヴィ・タルグへ行き、着いて4時間後の11時ころから1時間、レーニンと会見した。

レーニンは取調べに対して、自分はサンクト・ペテルスブルグで発行されている新聞『プラウダ』の通信員で寄稿家であり、20年来のロシア社会民主労働党員で、政治的亡命者だと言い、自分の行動がすべてロシアの政権に楯つくものだといくら説明しても駄目であった。

レーニンがオーストリアの官憲に逮捕されたという報道がロシアの新聞に載ったので、彼の近親者とロシアのボルシェヴィキは、非常な不安にかられた。その上、ロシアの軍隊がクラカウの近くにおり、この軍隊の攻撃が成功すれば、レーニンはたやすくツァーリの警察の手に落ちかねなかったもので、この不安はいっそう強まった。実際ツァーリの警察は、すでにそれに応じた措置をとっていた。警保局は、ロシア軍西南戦線司令官アレクセーエフ将軍に、こう知らせた。「内務省の情報によればクラカウの監獄にレーニンという姓の方で知られる V. I. ウリヤーノフが監禁されているもようである、そしてレーニンはロシア社会民主労働党のすぐれた代表者であり、多年にわたる革命運動の経歴を持ち、党中央委員で党内の一派の創立者であり、手配中の人物である」と。そしてレーニンの逮捕命令を出し、彼を護送して、ペトログラード特別市庁に引き渡していただきたい⁴⁰⁾、と頼んでいた。

監獄でのレーニンの同室には、その地方の百姓たちがたくさん留置されていた。旅券の期限が切れたとか、税金を納めないとか、地方当局と口論したとか、という理由であった。フランス人もいれば、安上がりなので他人の通過証で国

40) *Biographie*.

境を越えたポーランドの官吏もあり、窓際に寄ってきた妻と監獄の壁越しに呼び合っているジプシーもいた。

レーニンは、彼らのために法律上の相談にのって、助けてやったり、各種の請願書を書いてやったりした。それはかつて彼がシベリア流刑されているときでもそうであった。

彼は次第にノーヴィ・タルグの獄中生活に慣れ、ますます落ち着いた元気なようすで、クループスカヤとの面会に出てくるようになった。この監獄の中で彼は、党は何をすべきか、突発した世界戦争をプロレタリアートとブルジョアジーとの世界的闘いに転化するためには、どんな行動をとるべきかについて、思いを巡らした。クループスカヤは彼に、戦争にかんしてつかんだ情報を伝えた。

また時々、監獄にはいくつかの新聞が届いた。レーニンは、やってくる同志たちに、交戦国の社会主義政党がどういう態度とっているかを詳しくたずねた。

レーニンの件は、その間すでに軍法会議にまわっていた。

ポロニンの農民、とくにおかみさん連中は、レーニンを目のかたきにしていた。国民一般がいかに血迷っていたかは、クループスカヤがある日レーニンとの会見が終わって、ポロニン駅からの帰り道に聞いたことから分かる。教会帰りの農婦たちが声高にわざとクループスカヤに聞こえるように、「スパイの成敗なら自分たちが今すぐにでも引き受けてやるし、警察が手を引くならばスパイの舌をきって、目をつぶしてやる」とまでいきまっていた。

これでは、もしレーニンが釈放されても、ポロニンに留まってはられない。そこでクループスカヤは、どうしても持って行かねばならない物を選び分けたり、荷作りをし始めた。家政はめちゃくちゃになってしまった。クループスカヤの母が病気だったので、夏のあいだ家政婦を雇ったのだが、その家政婦は、彼らの事、ロシアと彼らの連絡のことについて、前述のように嘘八百を隣近所に言い触らしていた。彼女はクラカウに行きたがっていたので、旅費と給料の前払いをやって、すぐ行かせるようにした。その代わり、隣の少女が、焚き付けや食料品の買い出しの手伝いにきてくれた。

クループスカヤの母はもう72才で、大変身体の具合が悪かった。何かが起きたことは感じていた。しかし何が起きたかは、はっきりと分からなかった。クループスカヤは母に、レーニンが逮捕されたことを話しておいたが、母は時々、彼が戦争に動員されたのだと言った。クループスカヤが外出すると、母は、彼女もレーニンと同じようにどこかへ消え去るのではないかと、不安がった。同居者チホミルノフは、物思いに沈んで煙草をくゆらせ、本を片づけたり、荷作りをしたりした。

レーニンをスパイ罪で告発したことは、全く誤りであった。だから警察と同様の電報が、ザコパーネのドクトル・マレークから打たれた。

また普通は次のように言われている。

アドラーやディアマントがオーストリア当局に圧力をかけ、レーニンの身元を保証したことが効を奏した。アドラーはわざわざレーニンのとりなしのために内務大臣⁴¹⁾のところへ赴いた。彼はこう請けあった。ツァーリズムにたいするレーニンの態度から見ると、彼の釈放はオーストリア・ドイツの動きにとって最も役立つだろうと。そしてレーニンが必ず協商諸国に反対して積極的な宣伝を行うだろうと、断言した。この理由で内務大臣は⁴²⁾感じ入った。そこでオーストリア内務省は、こういう命令を出した。

「議員アドラー博士とダシンスキーの言明によれば（後者は今クラカウでポーランド地方の組織に関係して軍部当局と恒常的に連絡をとっている）、彼らはウリヤーノフに関する情報を与える位置にいる。

アドラー博士の意見は、現状ではウリヤーノフは大変に役に立つであろうということである。軍法会議がウリヤーノフをどう管轄しているかを、警察当局が可能な限り速やかに知らせよう求める。」⁴³⁾

しかし内務省は、次の文書を作っている。

41) Schub は、外務大臣としている。しかし内務大臣であろう。

42) 同じく。

43) Schub, p. 158

「K. K. 内務省

国家警察局

1914年8月16日作成

今日、帝国議会議員ドクター・ヴィクター・アドラーとドクター・ヘルマン・ディアマントが当方に来、こう述べた。クラカウで多年にわたり、ロシアの革命家ウラジミール・ウリヤーノフ、通称レーニンが、差障りなく邪魔されず、生活している。

彼の妻の知らせによれば、彼はこの数日のうちにポロニンで憲兵によりスパイ嫌疑で逮捕され、ノイマルクトへ連行され、そこからノイサンデツの検事局に引き渡され、軍法会議に送られた。クラカウの警察署長は、レーニンを大変よく知っており、すぐ検事局へ釈放のため電報で介入した。だがその電報は到着が遅すぎた。

両議員は、こう保証した。レーニンはロシアの仮借ない敵であり、オーストリアには役に立つであろうと、そして彼がすぐ拘禁から釈放されるよう願うと。本官はこう答えた。レーニンは軍法会議に委ねられているので、内務省は釈放には関与できない、と、そして事件を出来る限り速やかに確かめ、この件を内務大臣閣下に報告する、と約束した。

署名：読めない〔原文〕⁴⁴⁾

以上のことから、アドラーとディアマントは、内務大臣ではなくて内務省に行っただけではないか。

別の代議士、ポーランド社会民主党のマレーク Marek は、個人的にクラカウの警察署長に掛け合った。その警察署長は、確かに立派な古いオーストリアの官僚であった、だが、スパイ容疑で拘留された者を扱うときに……外見上、無情で冷酷ではなかった、彼はレーニンのためにクラカウの軍司令部に干

44) Wie Victor Adler Lenin rettete. in: Arbeiter=Zeitung, 1924. 4. 20.

渉した、そこで彼はこう言われた、軍当局はつねにこう言う義務がある、行為を吟味した後、それ相応の処分がなされるであろう、と。

アドラーとディアマントは譲歩しなかった。彼らは、軍当局やまた古いオーストリアを信頼してはいけないことを知っていた。そこでレーニンを取り戻そうと努力した。スパイと仮定された者の命は、当時とても安かった。すでに次の日、内務省の事務機構は動いた。それだけでなくクラカウに電話をした。その時また誤りが正された、つまりレーニンがロシアの仮借ない敵であり、オーストリアには役に立つであろうと。

次の文書が残されている。

「

Ad. 1537 914

戦争監視局

クラカウの警察監督部（警察起草者 ダンキエヴィッツ）は、軍法会議に回されたロシアの革命家ウラジミール・ウリヤーノフの件で次のように電話をした。：

”帝国議議員ドクター・アドラーとドクター・ディアマントは当所にあられ、次のように述べた。ウリヤーノフはツァーリズムの徹底的な敵であり、ロシアに対する闘いに生涯を捧げた、そしてもし彼がロシアにいれば、そこで直ちに極めて強力に行動するだろう、たまたま処刑されるかもしれないが。彼は目下、ロシア・ツァーリズムに反対する闘争のためにヨーロッパ的名声がある。ドクター・アドラー（社会民主党の指導者、ウィーン 6, ブリュームメルガッセ 1）とレンベルグのドクター・ディアマント（現在の住所、ウィーン 19, ビルロートシュトラッセ 18）は、ウリヤーノフがスパイでないと保証した。彼らは、彼について詳細な情報を与える位置におり、保証人として申し出ている。

いわゆるウリヤーノフの所で発見されたという統計的な研究（数字や比較対照）は、上記議員の考えによると恐らく、ウリヤーノフが研究していた農業事情の領域に関係している。ドクター・アドラーとドクター・ディ

アマアントが真実を述べているという様子である。

警察監督部は、上記議員の指摘を以上の留保つきで、ウリヤーノフの引き渡されている軍事法廷に知らせるよう求められる。”

ウィーン、1914年8月17日午後3時15分

長官局

国家警察局

イスコウスキー

戦争監視局

」⁴⁵⁾

この文書は、ウィーンからクラカウの警察にとどいた。これを紹介したオーストリア社会民主党の機関紙は、こう述べている。——ドクター・アドラーとドクター・ディアマントは、外見上だけでなく実際に真実を述べた。レーニンは、釈放された。だがオーストリア・ハンガリーには留まらなかった。彼はスイスに行った、……オーストリア社会民主主義者の国際的連帯が、彼を軍事法廷から救った。——

5

8月19日にレーニンは監獄から釈放された。それでも彼は丸11日間、留置されていたのであった。釈放の時、特別待遇のあつかいで出国許可が下りた。この日いつものようにクループスカヤは、朝からノーヴィ・タルグへ行った。この日は荷物を持ち出すのを手伝うのに、監獄の中まで入れてもらった。彼らは汽車を待たずに、すぐ農民の荷馬車を雇って、ポロニンに向かった。

レーニンが釈放された時、第二インターナショナルの裏切りの態度はもはやすでに疑いなかった。ドイツ社会民主党は戦時公債に賛成していたし、フランスの社会主義者はブルジョアジーの側に立った。他の諸国でも事情は同じであった。レーニンはこれらの事実で落胆した。特にがっかりしたのは、戦前に労働

45) Ibid.

運動の左派とみなされていた多くの社会主義者（たとえばジュール・ゲード）たちが戦争を支持したことであった。

釈放されて一週間は移転の許可を取るまでポロニンにいななければならなかった。その後にレーニンは、クループスカヤとその母と一緒に、クラカウへ向かった。クラカウで彼らは、以前カーメネフ（ボルシェヴィキの指導的党员）やイネッサ・アルマンド⁴⁶⁾が部屋を借りていたおかみさんの所へ行った。部屋は半分は診療所に使われていたが、隅を貸してくれた。彼女はレーニンたちを構っているどころではなかった。ちょうどクラウスニクで最初の戦闘が行われ、志願兵として出征していた2人の息子がそれに参加しており、その消息が分からなかったからである。翌日レーニンたちは、宿の窓から恐ろしい光景を見た。列車が死傷者を運んでクラウスニクから到着したのである。その戦闘の参加者たちの近親者が、担架の後を追って、恐ろしそうに死傷者の顔をのぞき込み、近親者を見分けようとしていた。軽傷者は、頭や手に包帯を巻いて、ゆっくり停車場から出てきた。

さてこの時、クループスカヤの母に大金が入った。その妹が女学校のクラス担任教師だったが、ノヴチェルカスクで亡くなり、財産を彼女に遺したのである。銀のスプーン、聖像、衣類、30年の教員生活で貯えた4000ルーブル、であった。この金を引き出すために、ウイーンの仲買人と交渉したが、彼女は手数料として金額のちょうど半分を取った。一家は残りの金を、主として戦時中の生活費に当てた。その2000ルーブルは、その間非常に儉約して使ったので、彼らが1917年にロシアに帰った時、若干残っていた。⁴⁷⁾

クラカウでは、中立国のスイスへ移る権利がかなり早くとれ、レーニンは、旅券を手に入れ、8月28日⁴⁸⁾に家族とともに汽車にのってクラカウをあとに

46) Ине́сса Арма́нд, 本名エリザベータ・フョードロヴナ, 1874-1920。1904年からボルシェヴィキ党员, 戦時中レーニンとともに活躍する。伝記ポドリャシューク『革命家として母として』大月書店。

47) もちろん、この金だけで生活したのではなく、スイス時代にも種々生活費を稼いだ。だからこの金だけを使ってそれでも余ったというのではない。

48) 『全集』第20巻, 677 ページ。

した。途中、軍用列車を待避しながら、長いこと駅でとまった。尼僧が排外主義的アジテーションをしたり、婦人の活動家がそのまわりに群がっているのを、彼らは見た。彼女たちは駅で兵隊に聖像を与えたり、祈りをしていた。血色のいい軍人が行き来していた。車両は色々な標語や指令でしみだらけになり、フランス人やイギリス人をどうしろとか、「ロシア人を一人残らず射殺せよ」と書かれていた。ある待避線には、蚤取り粉を積んだ貨車が数両おいてあり、それらはどこかの戦線に運ばれて行くのであった。

レーニンたちはこうして数日間かかってやっとウイーンに着いた。家族はウイーンに1日滞在した。必要な証明書を受取り、金銭上の用件を済ませ、スイス行きの保証をもらった。スイスの一番古くからの社会民主党員グロイリヒ Hermann Greulich が保証をしてくれた。リャザーノフ⁴⁹⁾ が、レーニンの釈放に尽くしてくれたヴィクトル・アドラーの所へ、連れていった。

アドラーはレーニンに、あの時、自分が大臣ハイノルト Heinold と交わした会話を話して聞かせた。――

大臣は、「貴方たちは、ウリヤーノフがツァーリ政府の敵だと確信しますか？」と尋ねた。

アドラーは、「もちろんです。彼は閣下よりも不倶戴天の敵であります。」と答えた。⁵⁰⁾

インスブルック、フェルトキルヒを通過してスイス国境までは、かなり速く達することができた。国境駅ブーフス Buchs で、彼は引き留められた。妻と義母はパスを持っていたが、レーニンは持っていなかった。合法的旅券なしでスイス入国の許可を得るために、百フランの保証金を供託することになった。レー

49) Рязанов, 本名ダヴィド・ボリソヴィチ・ゴリデンドフ, 1870-1939。後の有名なマルクス学者。このころメンシェヴィキ派について、亡命中であった。

50) *Biographie*, S.305; このエピソードを初めに出したのはクループスカヤらしい。しかし、両議員が本当に内務大臣に面会したかは分らないのではないか。アドラーが話し、レーニンがその話をクループスカヤに述べて、それを書いているのだから。前述の資料では、両議員は内務省に行っている。大臣にあったとは明示されていない。

ニンは、ベルンのスイス社会民主党の指導的役員——グロイリヒであろう——に電報を打った。「ここブーフスで留められた。入国の保証を引き受けて下さい。」⁵¹⁾

9月5日、レーニンは家族一同と無事にチューリヒ⁵²⁾に到着した。ここからヴィクトル・アドラーにあててお礼の手紙を書いている。「スイス入国には旅券を要求されるのですが、グロイリヒの名前を挙げたところ、旅券なしで通過させてくれました。」⁵³⁾

2. 対プレハーノフ

本項では、亡命先のスイスでプレハーノフとレーニンが対決した一エピソードを扱う。レーニンはこの頃ベルンにいた⁵⁴⁾。そして問題は、戦争についてどういう態度をとるかであった。

※ ※ ※

ゲオルギー・プレハーノフ⁵⁵⁾が祖国防衛主義者になったという噂が急速に広まった。パリから帰ったプレハーノフがジュネーヴで演説し、また1914年10月初めにローザンヌで公開演説の準備をしていることが、レーニンたちに分かった。

プレハーノフは、ロシアでマルクシズムを宣伝した初めての人物であり、当時ヨーロッパでマルクシズムの理論に取り組んだ社会民主主義者の一人であった。レーニンは彼と共に活動したことがあった。その時プレハーノフはボルシェヴィキと別れてはいたが、だからといって今、労働者階級の裏切り者になってはいないだろう、レーニンは思った。

51) Pianzola, *Lenin in der Schweiz*. Berlin 1956 S.70

52) そしてその後ベルンへ向かうのである。

53) 『全集』第36巻 320 ページ。

54) 拙稿「ベルンについたレーニン」(本誌71しゅう) 参照。

55) プレハーノフについて、下記を参照。バロン『プレハーノフ』恒文社；田中真晴『ロシア経済思想史研究』ミネルヴァ書房

プレハーノフは、レーニンの思想的発展に大きな役割を果たし、彼が自分の革命の道を見出す助けとなった。レーニンは、マルクス主義をプレハーノフの著作によって学んだのである。そこで長い間、プレハーノフは彼にとって憧れの的であった。だからプレハーノフとの意見の相違は、ほんのわずかでもレーニンにはひどく苦痛に感じるものであった。彼と分裂した後でも、プレハーノフが語ったことには注意深く耳を傾けた。「日和見主義者として死にたくない」というプレハーノフの言葉を、レーニンは非常な喜びをもって繰り返すのであった。ウラジミール・イリイチが自分をプレハーノフに対置したことは決してなかった。⁵⁶⁾

レーニンは、だから、プレハーノフが祖国防衛主義になったことに半信半疑であった。

「それは実際本当か？」

と、彼はカルピンスキー⁵⁷⁾ たちに聞いた。レーニンをプレハーノフの演説に誘った数人の同志たちは、そのため気が減入った。

「単純には信じることができない」と、レーニンは言い、⁵⁸⁾

「プレハーノフの軍事的経歴がはっきり現れたのだ」と、物思いに沈んで、付け加えた。⁵⁹⁾

プレハーノフの演説が「明日10時に」行われるという電報が、10月10日に届いた。レーニンは、自分の公演演説の準備をしていたが、プレハーノフの報告を聞きにいかうと決心した。

「是非ともそこに出席しなければならない。」

しかし重い気持ちであった。ローザンヌへ行くことを、プレハーノフに予め知れないようにする必要がある。

56) K.Krupskaya, *Das ist Lenin*, Berlin 1970, S. 26 ; クループスカヤ『レーニンの思い出』上, 36ページ。

57) ヴェ・ア・カルピンスキー (1880年生れ), 1904年ジュネーブへ亡命。1917年まで国外生活をする。その間、ボルシェヴィキの新聞で活動。

58) *Genosse Lenin*, Berlin 1967, S. 83.

59) プレハーノフは、士官学校卒業である。

「私が行くことを知ったら、彼は演説しないかもしれない。」

彼はそれが心配だった。

この演説会では、メンシェヴィキの人々と、プレハーノフの仲間の狭いグループの中で、戦争に関する演説が行われることになっていた。この演説は前もって広く知られていたために、特に強い関心が持たれていた。それにプレハーノフは、第二インターナショナルの領袖たちと同じく、議長席を占める人物であった。

ローザンヌの余り大きくない不格好な建物である人民会館（メソン・ドゥ・プープル）がプレハーノフの演説のために借りられた。ロシア人の演説のほとんどすべてがここで行われてきた。兵舎風で1階建ての細長い建物で、側壁には窓が沢山あった。多くの人が集まった。

レーニンはローザンヌに行った。妻のクループスカヤは行かなかった。ボルシェヴィキの側で参加したのは、ベルンからジノヴィエフ、イネッサ・アルマンド、シクロフスキー、クラランのボージャからはロズミロヴィチ、クリレンコ、ブハーリン⁶⁰⁾、当地ローザンヌの同志たち、カルピンスキー、フォードル・イリイン、ミハイル・セルゲーヴィチ・ケドロフであった。

戸口で集会主催者の一人が、入場料を集めていた。人民会館の門の所でレーニンは、同志のグループと話をしていた。そこにボルシェヴィキのケドロフが来た。レーニンは、彼をイネッサ・アルマンドに紹介して、言った、

「貴方がたは二人とも、確かモスクワっ子だったはずだ。」

それからまた彼を、変名の「アブラム」の方が当時もっと有名だったクリ

60) ニカライ・イヴァノヴィチ・ブハーリン、1888年9月27日モスクワ生まれ、1906年入党し、1911年以来亡命していた。クラカウに住んでいたレーニン詣でを後回しにして、まっすぐハノーファーに向かった。レーニンとの初会見は1912年にクラカウであった。1912年末から1914年夏までウィーンに住む。1914年秋に『有閑階級の経済理論』を完成（1919年出版）した。西欧社会民主党の裏切りの結果、ボルシェヴィキの中の最も西欧志向的な人々——ブハーリンのような——でさえも、もっとセクト的な見解に立つようになった。（S.F.コーエン『ブハーリンとボルシェヴィキ革命』未来社 1979年）

レンコにも紹介した。

レーニンは、公開演説会に入れないのではないかと、心配し始めた。主催者側の「メンシェヴィキが、これだけのボルシェヴィキを入場させないのではないか？」と、怒りっぽい言い方をし始めた。そこでカルピンスキーたちは、入場係の前では全部一度に入場券を見せ、イリインはレーニンを隠すように、彼の前に立って歩いた。そしてレーニンは、素早くホールの雑踏の中に入り込んだ。彼は注目されないように、壁からすぐの、後ろから二列目に座った。しかし広間では直ぐささやきが広がった。

「レーニンがここにいる！ レーニンだ！」

報告の時間はとくに過ぎてしまっていた。だがプレハーノフはまだ見えない。集まった人々が、あちこちで皮肉な文句を飛ばした。

「やって来ないんだ！ ためらっているんだ！」

司会者の少し不安の色が見えた。

「約束したのだから、きっとやって来ます……恐らく汽車が遅れたのでしょう。」

レーニンは帽子を被ったまま、両肘をついて座っていた。手には何かメモを握り、それを注意深く読む振りをした。彼は穏やかではなかった。

「これはどういうことなのだろう？ 我々がここにいるのを知ったのではないか。逃げたのか？」

そう言って、隣のイリインに心配そうに尋ねた。しばらくしてホールに、興奮した知らせが響き渡った。

「やって来た、やって来た……こちらへ歩いてくる！」

プレハーノフは、追従者や礼賛者の歓声に囲まれながら、ゆっくりと広間を通り抜けて、威風堂々と演壇に登った。濃い眉を動かし、ホールをひと渡り見回した。彼は、十人か十五人の少数の仲間だけでなく、もうすでに当地のロシア人がほとんど皆来ていると思われるほど集まっているのに、気が付いた。

プレハーノフの演説は、いつも威風堂々としていて、満員の聴衆を集めた。群衆が詰めかけて、高い入場料を払った。⁶¹⁾

ケドロフは、プレハーノフの来場以前に、広間に入って、入口にほど近い後方の列に席を取った。演説の初めに彼が振り返ると、レーニンがいた。レーニンは、ケドロフの背に隠れるように、上体を前にかがめて腰を下ろしてした。

「まっすぐ座って、後ろを向かないで下さい」と、レーニンは、かなり厳しくケドロフに言った。彼は、自分が出席していることで、プレハーノフが気兼ねして、社会排外主義の見解を公然と表明するのをためらわせたくなかった。

プレハーノフは、遅れたことを詫び、「このような大きな集会で演説をする準備をしていなかった」と言った。

「抜け目がない」と、レーニンは近くの同志たちにささやいた。

プレハーノフは、ゴーゴリの『死せる魂』に出て来る旅行の話から、演説を始めた。皮肉な微笑を浮かべ、自分で楽しんでいるように話した。

「尊敬する貴方がたの集会は、マニロフの所にお客に呼ばれて出掛けて行くチチコフのことを、はからずも私に思い起こさせました。彼は途中で出会った百姓に尋ねました——ザマニロフカ村は、ここから遠いでしょうか？　すると返事を受けたのです。——マニロフカじゃないですか、ザマニロフカではないでしょうか？　ザマニロフカなんてありませんよ……そこで私は、これと同じような質問を貴方がたに出したいと思います。」

プレハーノフは、演説に入った。それは学識がたっぷり入った武器庫であった。マルクスとエンゲルスからの引用で満たされ、才気あふれた例証や比較が、歴史から、聖書からなされ、古きギリシャの哲学者ルシアンから、また文芸書からなされた。そして敵に対しては、刺すような嘲笑を加えた。

これらすべてのためにプレハーノフは「不敗の騎士」という外観を受けた。メンシェヴィキたちは、彼らの指導者に物凄い拍手を送った。

演説は、二つの部分に別れていた。前半でプレハーノフは、ドイツ社会民主党などをプロレタリアートの本分を裏切ったという理由で鋭く批判した。彼は、社会民主党の代議士たちが帝国議会で戦時公債に賛成したことに、憤慨した。

61) 鳥の巣のようなゴツェリお化粧をしたマダムたちが、プレハーノフの演説する会場の常連であった、と悪口を言う人もいる。もっとも、そういう人を集めないよりは集めた方がよいだろう。

そしてドイツ社会民主党を「日和見主義のソドムとゴモラ」⁶²⁾と名付け、そこには正しい人はほんの少ししか残っていない、と言った。

この演説は、力のこもった拍手を受けた。レーニンは生き生きとし、笑い、演説のこの前半部に高く手を上げて長い拍手をプレハーノフに送った。明らかに、プレハーノフがフランスの社会愛国主義者たちの対しても同様の演説をするのを励まそうという考えであった。

ところが、演説の後半部は、レーニンをがっかりさせたのである。

プレハーノフは、話し始めた。

「フランスは攻撃されている。フランス社会主義者たちは、自国の奇跡のために『トルストイ的な落ち着きで』行動することはできない。」

「フランスとベルギーの社会主義派代議士たちが、戦時公債に賛成し、またブルジョア内閣に入ったことは、正しい」と、主張した。

「彼らを非難することはできないし、彼らはそれ以外には行動をとれなかった。」

プレハーノフは、フランスの社会愛国主義者サンバ⁶³⁾が語ったかつての機知を恥ることなく言った。サンバは、ロシア社会民主党議員団がロシア帝国議会（ドゥーマ）で戦時公債に反対した時に、言ったのである。

「ロシアの五歳の社会主義の娘には、純潔を保つのは、フランス社会主義の婦人よりもやさしい」。

そしてプレハーノフは叫んだ、「『労働者は祖国を持たない』というマルクスとエンゲルスのテーゼは、間違い（!）であり、誤っている（!）」

プレハーノフの基本思想は、ロシアのコサック兵とフランスの自由共和国軍隊の援助によって、西ヨーロッパの文化をドイツの軍靴によるじゅうりんから救済することであった。

62) 聖書から：悪徳の町、を意味する。

63) マルセーユ・サンバ Sembat (1862-1922), フランス社会党指導者, ジャーナリスト, 下院議員。第1次大戦中, 労働相として政府に入閣した。

プレハーノフは、大成功であった。そしてその成功は難しいものではなかった。多様な聴衆の中で、大多数は、クラランやモントルーから来たインテリやブルジョア、プレハーノフの追随者、メンシェヴィキ、であったからである。

プレハーノフの演説が終わって、嵐のような拍手が止まぬうち、レーニンは自分の席から飛び出して、発言を要求した。演説の申し込みをしたのは、レーニンだけだった。彼にはたった10分（15分という説もある）の時間が与えられた。

プレハーノフには、思いがけないレーニンの出現であった。当時ベルンに住んでいたレーニンがやって来るとは、夢にも思っていなかった。今やレーニンは、ザマニロフカに苦情を申し出る大きな権利が持てた。

レーニンは、演説台に行った⁶⁴⁾。興奮で青ざめていたが、外見は落ち着いていた。彼はプレハーノフに握手をしなかった。また彼を「同志」と言わずに、「報告者」と呼んだ。もちろん参加者は、すぐこの事に気が付いた。

レーニンは、演説をこう始めた。

「党中央委員会の制作した我々のテーゼは、イタリア人の所⁶⁵⁾へ送られた。テーゼの多くの項目が——残念ながらその全部ではないが——ルガノの決議に取入れられた。」⁶⁶⁾

プレハーノフの演説の前半部分は、気に入った。「ドイツ社会民主主義者がカイザー〔＝ドイツ皇帝〕および軍部を支持したことを、プレハーノフが批判したのは、全く正しかった。」しかし、後半についてはそうは言えない。

レーニンは、10分間の嵐のような攻撃で、プレハーノフの社会愛国主義の立場、彼の博識、機知、輝かしい文献的装飾の一切合切を含めて、面と向かってやっつけた。

64) この時レーニンがビールのコップを両手に持って行ったと言う人がいるが、酒もタバコもやらないレーニンがもっていたとは、不可解である。

65) イタリア社会党の会議、注54) 拙稿参照。

66) 『戦争にたいする社会主義者の態度について』のゲ・ヴェ・プレハーノフの公開報告会での演説（『レーニン全集』第6巻、328ページ）

「イタリア人に戦争を呼びかけたフランスの社会主義者を、どうして擁護できようか？ どうにでも解釈できるインタナショナルの決議でさえ、この呼び掛けを正当化している箇所をみつけるのは難しい。」

「フランスの愛国主義の行動を弁護し、彼らの入閣を正当化し、攻撃と防御についての偽まんの中傷を真面目に取り上げたことは、革命的マルクス主義者たる資格がない。」

「今の戦争は、大きな日和見主義の波がヨーロッパ社会主義の内部から高まってきたことを、示した。ヨーロッパの日和見主義者は、自分の名誉を回復するために、『組織の保全』という昔の使い古された論拠に訴えようとした。ドイツの正統派〔＝左派〕は、党の形式的統一を守るために自分の立場を放棄した。私は、問題をこのように提起することの中に日和見主義がひそんでいると、常に指摘してきたし、原則を譲る調停主義と常に闘ってきた。ヴァンデルヴェルデ⁶⁷⁾やカウツキー⁶⁸⁾の決議は、日和見主義の傾向があり、明白な矛盾を和らげようとしている。カウツキーは、論文『戦争について』で、極端なことまで言って、すべてのものを正当化した。つまり主観的には皆危険に脅かされていると考えており、社会的には自分の生存権がじゅうりんされたと考えているから、各自の見地からは皆正しいのだと、声明した。もちろんフランス人がこのような気分を持つことは、その時の心理から、人間性から見地から見れば、かなり理解できる、だからより同情すべきことであった。しかしそれでも、社会主義は、攻撃への恐怖だけでは判断を下せない。率直に述べねばならないが、フランス人の行動は、社会主義的であるよりは排外主義的であった。」

レーニンは続けた。

「誰が最初に攻撃したかは究明できないと主張する同志たちを、プレハーノフは批判している。私の意見では、今の戦争は、偶然のものでは決してなく、ブルジョア社会の発展の全条件によって準備されたものである。今の戦争がま

67) Emile Vandervelde エミール・ファンデアフェルデ、1866－1938。ベルギーの政治家、労働党、下院議員。1900年、第2インタナショナル議長。

68) Karl Kautsky, 1854－1938。ドイツ社会民主党の理論家。左派・平和主義者。大戦中レーニンはおもに彼にたいする批判を行うのである。

さにあのような組合せで起こり、まさにあのような方向で起こることが、ずっと前から予見されていた。バーゼル大会は、この戦争についてはっきり述べ、セルビアが紛争の口実になるだろうとさえ予見した。」

「決して、良心ある社会主義者は、プレハーノフの忠告を支持しないであろう。」

「戦時の社会主義者の義務がどんなものか。……—シュトゥットガルト、コペンハーゲン、バーゼル⁶⁹⁾—は、すでに、切迫した戦争に対する社会主義者の態度がどうあるべきかを、規定している。社会民主主義者は、自国の排外主義の陶醉と闘うときにだけ、自分の義務を果たしたと言えるのである。セルビアの社会民主主義者は、このように義務を果たした立派な模範である。」

レーニンはまず、自国の日和見主義を暴き、軍事予算に昂然と反対投票したチェコ議会の社会主義議員のように、自国政府と闘争せよと、述べた。

「プロレタリアートは、ブルジョア国家の古い枠を守ることではなく、『労働者は祖国を持たない』というマルクスの言葉を忘れずに、社会主義共和国という新しい枠を作り出すことに参加しなければならない。広範なプロレタリアートの大衆は、その正しい本能によってこのことを理解しないわけにはゆかない、つまりヨーロッパに今起こっている事は、最悪であると同時に最も強固な偏見をあてにすることに他ならないのだと。」

「我々の任務は、流れのままに泳ぐことではなく、民族戦争や、まやかしの民族戦争を、プロレタリアートと支配階級との決定的な衝突に転化させることである。」

レーニンは、各国の社会民主主義者の行動とその腐敗を全面的に明らかにし、第二インタナショナルが死滅し、もう二度と生き返らないと主張した。そして社会主義者が入閣したことを批判し、政府のあらゆる措置に同調して社会主義者が担っている責任を指摘した。最後に彼は、こう語って演説を結んだ。

「大臣になるよりも、中立国に去ってそこから真実を語る方がよい。自由な

69) 第2インタナショナルの大会が行われた諸都市。

独立の言葉でプロレタリアートに訴える方がよい。」

プレハーノフは再び登壇はしなかったが、いつもの機知で反駁した。集会は愛国主義に酔っていたので、レーニンの演説に侮辱を感じて、憤慨した。極く稀に皮肉な拍手があった。圧倒的多数を占めていたメンシェヴィキはプレハーノフに熱烈な拍手を送った。そしてレーニンは、同志たちの僅かなグループと一緒に、孤立しているように見えた。

レーニンが、与えられた10分間で論ずることができたのは、ボルシェヴィキ中央委員会の戦争に間する宣言の基本思想と、祖国防衛主義に反対する極めて重要な論点だけであった。

彼が議論全体を完全に行えるように、まもなく3日後、10月14日に、同じ建物で、「プロレタリアートと戦争」という報告会を聞くことが決定された。

普通、レーニンの演説を聞きにやって来る者は、まず党员、労働者、学生といった素寒貧が多く、入場券を買うための小銭さえ持ち合わせない連中だった。施設のための支払いもできないことがあった。

だがこの報告会は、入場無料をうたったために、人は相当集まった。⁷⁰⁾

70) 『レーニンの人間像』世界文庫 1967年

(資料の利用にさいして、Bern の Landesbibliothek に感謝している。)